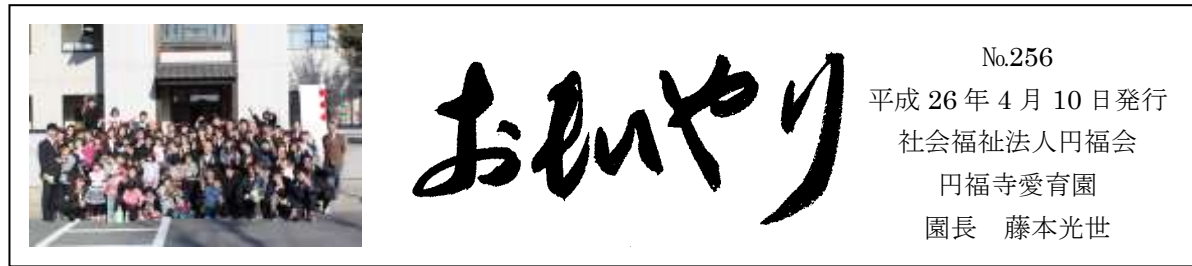


3 月 23 日の卒園式で、6 名の園児が巣立ち、自立していきました。



専門家の仕事

園長 藤本光世

児童養護施設の子ども達を育てる仕事は、高度に専門家の仕事です。6 年かかって、このことが身に沁みて分かってきました。

ところが、世間一般はこの仕事は高度に専門化の仕事であることを知らないのです。関係機関である児童相談所も、こども・家庭課も、あるいは児童養護施設に様々な提言を行う方々も、どの程度このことを知っているのか疑問に思うことがあります。

専門家とは何でしょうか。例えば、工場の仕事を例にしましょう。何かを作る時に、専門家と素人では大違いです。素人が作ったものは、品質が悪く、あるいは不良品が続出するでしょう。お医者さんならどうでしょう。素人では、人を病気にしたり、殺したりしてしまいます。許されないことです。

ところが、児童養護施設の仕事は、できたものの品質は分かりません。子どもを立派にして、自立させ卒園させることが目的ですが、実際そのようにできているのかは見えません。しかも、子どもが自立できないことを、育った家庭の所為にし、あるいは子どもの資質の所為として責任を逃れることさえできるのです。したがって、児童養護施設で子どもを養育する専門家として、どのようなことが必要なのか、どのように育てればいいのかは、見えないのです。

専門家を育てるには、専門家が必要です。保育士には保育士養成校があります。保育士養成校で、児童養護施設を経験している先生はどのくらいいるのでしょうか。ほとんどいないと思います。それでは、児童養護施設を経験したとしても、そこで厳しい現実突き当たり解決の経験を通して、専門家に育てられた先生はいるのでしょうか。皆無だと思います。工場の仕事はその仕事ができる専門家が教えてくれます。手取り足取り、といったふうに教えてくれるのです。お医者さんは、お医者さんの経験がある専門家が育てます。時間をかけてインターンも行います。ところが、児童養護施設の専門家は、児童養護施設の経験がない人が、こうすればいいだろうと、素人の考えで学生を育てるのです。あるいは、外国の考え方を押し付けてくるのです。それが、現場で役に立たず、むしろ現場を混乱させることになることは、明らかでしょう。専門の学校を卒業した若い職員が困難に耐えられず早期に退職することは目に見えています。ここに児童養護施設の仕事の難しさと、混乱の源があります。

児童養護施設の養育の専門家になるには、児童養護施設の仕事の中で、経験を通して専門家になった人から学ぶしか育てる方法がないのです。この 6 年間の私の結論はここにあります。

児童養護施設の仕事は、非常に複雑で、高度で、しかも人間性が問われます。一人前になるには 10 年以上はかかります。10 年経っても、資質が向かない人は専門家になれません。それは、理系が苦手な人が、いくら頑張っても物理が理解できないのと同じことです。お医者さんだっけそうでしょう。いくらお医者さんになりたくても、医学部に入れなければお医者さんになれないし、なったところで、失敗される方はいるのです。

この仕事で、一番困るのは、専門性を理解せずに、当園の養育に口を挟んでくる人です。当園の養育を理解して、それに協力すると言う姿勢を取らずに、自分の方が正しいと意見を振り回し、当園の養育に容喙し、押し付けてくるのです。例えば、高校生になれば携帯電話くらい持たせてもいいのではないかと、例えば実親のことを知らせてやってもいいのではないかと、等々々。実態を知らない、それらは、それがもたらす影響を知らない、今何をすべきかを知らない、無責任な発言なのです。その後始末は当園の職員にやらせるのです。それによる混乱は、当園の職員が引き受けなければならないのです。

専門家の仕事が外から見えないだけに、嫉妬と、誹謗中傷と、押し付けと、それによる混乱がまかり通る仕事もこの仕事なのです。なんと恐ろしいことでしょうか。

私たちは、この 3 月に 5 名の高校生卒業生と、1 名の高校中退生を卒園させ自立させることができました。彼らは、感謝の涙を流して園を去りました。私も、彼らの本心から出る言葉に感動しました。坂城高校の田中校長先生の校長通信「Student First」をご覧ください。これは、本当に凄いことです。誇れる実践です。

私たちは、仕事を通して児童養護施設の養育の専門家を育てます。職員の専門性が高まれば、それは子どもたちに大きく影響します。子どもたちはもともと大きく伸びるでしょう。私たちは実践の事実で示します。

卒園式

Student First (坂城高校田中校長先生の校長通信) より

卒園式に出席して

3 月 23 日。円福寺愛育園の卒園式にお招きいただいた。

汰一くんの担任、吉澤先生とご一緒に最前列に座らせて頂いて、式の開始を待った。会式前には、坂高の予餞会と同じように、園児たちの一年間の活動の様子がスライドで映写され、様々な行事の場面で子どもたちの笑顔がはじけていた。寄り添う職員の方々の優しい眼差しも印象的だった。

園長の藤本光世先生が導師を務められて入場し、曹洞宗の作法による礼拝から式は始まった。壁に貼られた式次第に「礼拝」とあるので、「手を合わせてご本尊におまいりして始まる」と思っていたら、予想は全く外れた。ものすごく荘厳な雰囲気の下、2 時間以上に及ぶ式が始まった。

出席者全員による般若心経の読誦、藤本導師の五体投地のように見える礼拝が繰り返されて、出

席者も手を合わせる。園児たちは乳飲み子から卒園者（一番上は 20 歳）まで、全員が般若心経をそらんじて、手を合わせる。朝のお参りを欠かさない彼らの日頃の生活の様子が目に浮かんだ。

藤本先生による、卒園児 6 名に対する気持ちのこもった温かな式辞。一人一人の成長の跡をたどるように、各人の来園の経過や反抗や失敗の思い出、その時々の変化や立ち直りの様子、またそれを支えてくれた方々への感謝の思いが語られた。原稿も見ず、天空に台本があるかの如くの語り口だった。

本校の卒業式で言えば「送辞」にあたる在園生のあいさつでは、定時制高校に通う女子児童が、16 年余りの自身の育ちをたどりながら涙ながらに思い出と感謝を語った。これも珠玉の挨拶だった。

「答辞」は、6 名の卒園児全員が 1 人ずつ、自身の愛育園での 10 数年間に思いを込めて語る。会場内からは、女性を中心に「鼻をすする音」が何度も聞こえてくる。ハンカチを手放せなくなる方も続出する。仲間の語りに、壇上で目頭を押さえる卒園生もいる。

汰一くんの挨拶も立派だった。時間をかけて書いたと思われる原稿は 10 枚近く、途中で声が詰まることも度々で、15 分以上語り続けた。自分が入園した 2 歳のころのこと、野球との出会いや人との出会い。厳しく叱り、かつ支えてくれた園の先生方への感謝。そして、3 年生最後の 2 ヶ月の「反省の日々」。坂高の様々な行事で MC を務めた「明るくおちゃらけた汰一くん」の姿はそこには無かった。



10 時 30 分に始まった式は、13 時に終了した。長いけれど、心に残る式だった。そして、その場で思ったことは…以下のようなことだった。

とかく、児童養護施設に暮らす子どもたちは、こちら側から「支援する」「助けてあげる」対象なんだ、(言い方を変えると「かわいそうな子どもたち」なんだ) と思っていた (少なくとも田中はこの日まで…) 施設では、親の愛を感じることができないだろう、とか、集団生活でガマンばかりしている、とか。

しかし、この日感じたのは、「それは一面の真理かもしれないけれど、そうじゃない。彼らは強い」ということ。家庭がなくても、家庭で暮らすことができなくても、こんなにも中身の濃い幼少期～青年期を送ることができる場がある。そして、厳しい環境の中だからこそ彼らが経験してきた幾多のこと(答辞に込められている)を通じて、彼らが園で身につけた「宝物」がある。だから彼らは、本気になって自分に関わってくれた人がいる、という自信を持って旅立っていける。彼らは、愛育園で育ったことを、胸を張って他者に伝えられる。園長藤本先生、副園長青谷先生の、この日の笑

顔とお二人の瞳を濡らした涙が、そのことを田中に教えてくれた。たくさん教えられた 1 日。隣席の吉澤先生の涙は枯れていた。

卒園を祝う会

副園長 青谷 幸治

平成 25 年度は 6 名を卒園させることができました。内 4 名は 2 歳の入所から立ち会いここまで大きく育ったことに感慨深いものを感じました。子どもたちはそれぞれ自分の生い立ちがあり、また大きなものを背負って生きてきました。中学生のころ職員の問題が起き、大人なんか信じない。どうでもいいや。という気持ちになったという。問題行動が増え、周りへの迷惑など全く考えることができず過ごしていました。

体制が変わるとその体制にも順応できず文句が絶えなかったことを思い出されます。しかし職員の懸命な指導と心のこもった関わりが増えると子どもたちの心にも伝わったと思います。本当の家族でなくても、本当の家庭でなくても自分の家として本当の愛着を感じることができたのも高校 3 年生になってからでした。あと 1 年で退所と思うと不安で寂しくてしかたない。そんな話も増えてきました。この 1 年で何とか今までの恩返しをしたい。そんな気持ちが伝わりました。その間、T 君は母親を末期ガンで亡くし、最後まで看取ることができました。K さんは 18 年間会ったことがなかった母親に会うことができました。

いいことも悪いこともたくさんの経験を通して愛育園を巣立ち、4 月から社会人になりました。この卒園を祝う会は児童にとって大人になっていくための場であり、ステータスになっているように思います。今年度卒園する児童は、早速自分の 1 年後をイメージして動き始めています。

児童と職員、来賓の方々全ての方が作り上げる素晴らしい会だと思えます。卒園された皆さん、社会に貢献できる人になってください。おめでとう。

卒園式

まごころホーム長 石崎 早織

今年も別れの季節がやってきました。25 年度は 6 名の卒園生を愛育園から送り出しました。私の担当児童も 2 名卒園していきました。2 名のうち 1 名の M さんは高校 1 年生からもう 1 名の T さんは約 1 年間担当を持ちました。2 名の子どもたちと関わりを持つ中で本当にたくさんの事を学ぶ事が出来ました。T さんとは 1 年という短い時間でしたがとっても濃い 1 年でした。ユニットから本体へ移動したことで生活スタイルもガラリと変わり他の高校生がアルバイトをしている中で自分は何もしていないという焦り。そして将来の事を真剣に考えた時彼女の貯金額は無いに等しく、危機感を感じたのか、自分でハローワークへ行き面接の日程を決めてきました。このような行動がとれるようになった事はものすごい彼女にとって成長だと感じました。幸先よくスタートしたものの弱い心が出てしまい無断でさぼってしまい迷惑をかけてしまった事もありました。今までであればこれをきっかけに「辞める」という選択をしていた彼女でしたが、今回は簡単な方を選ばせる事はしませんでした。最後までやることの大切さ、やり抜いた時の達成感を味あわせたかったのです。何回も一緒にアルバイト先へ謝りに行った事は今となってはいい思い出です。周りの人に支えても

らいながらやり抜く事が出来たアルバイト。アルバイトを通して彼女は人との関わり方を学んだと思います。今まで接客業が苦手だった彼女ですが、これをきっかけに人と関わる楽しさを感じたのか就職した先は接客業。この先大変な事もあると思うけど、まずはなんでも挑戦し失敗しながら学んでほしいと思います。

M さんとはたくさんの衝突もありました。高校 1 年生になると友達と遊びたいという気持ちが優先し、遅く帰ってくることも多く、そのたび「早く帰ってきなさい。」と注意していました。しかしそんな言葉も彼女に届くはずもなく、毎日同じことで注意していたように感じます。アルバイトも始めてみたものの 1 か月で辞めてしまったり、2 年生になってもその落ち着きのない行動は続きある時、問題行動を起こし家庭反省になりました。家庭反省に入ると学校から出され課題をやり園で決めた反省日課に取り組まないといけませんが、これを彼女が拒み学校を辞めるという選択をしました。しかしそんな甘い考えで社会に出ても同じ失敗を繰り返してしまうだろうし、何とか高校を卒業し胸を張って愛育園を卒園してほしかった私は副園長にも協力してもらい、彼女が真剣に自分自身を見つめ直せるよう話をしてもらい、彼女の口からやり直したいという言葉が出るまで 4 時間待ちました。時間が経っていくにつれどんどん自分の考えが言いにくくなっていましたが、彼女が勇気を振りしぼり「もう一回頑張る」と言ったのです。これをきっかけに彼女は変わりました。自分の将来を真剣に考え、向き合う努力をしました。現状を把握しアルバイトも始め 1 年続ける事が出来ました。彼女の小さな頃からの夢でもあった美容師。少しでも夢に近づく為に長野市にある美容院へ就職も決まり、無事高校を卒業することが出来ました。彼女は卒園式の時もそうですが、「先生があの時学校の大切さを教えてくれたからここまでこれた。」といつも感謝してくれます。私自身彼女の指導に悩まされた時も多くありましたが、卒業式と一緒に立ち会う事ができ、いろんな困難と一緒に乗り越え私を成長させてくれた彼女に感謝しています。先日彼女の入社式に出席させて

いただき、彼女のこれからの目標を聞きました。「大変な事も多いと思うけど、施設の先生に恩をあだで返す形はしません。」と堂々と大勢の前で発表しており、その姿を見て涙が出ました。私は今回卒園する児



童を通して、最後までやり切る事の大切さを学びました。子どもたちはまだまだ一人では困難を乗り越える事は出来ません。だから園にいる間に乗り越えられる力をつけてあげることがとっても大切なんだと感じました。今園にいる子どもたちは今回の卒園式を見て、自分達もしっかりやらないといけない。という気持ちになっています。早く進路を決め方向性を出そうと動き出している児童もいます。それだけ今回の卒園式は園に残っている子どもたちにもいろんな事を感じさせてくれたんだと思います。卒園式を迎えるまでにたくさんの事はありましたが、無事 6 名が愛育園を巣立つ事ができホッとしています。いろんな事があった分少しさみしい気持ちもありますが、最後に「ありがとう」と言われた時、この仕事をやっていてよかったなと感じました。そう思わせてくれた最高の卒園式でした。

平成 26 年度方針

平成 26 年度 副園長方針

副園長 青谷 幸治

今年も昨年に引き続き副園長を務めます青谷です。よろしくお願いいたします。

昨年は、園内で解決できるような問題行動のみで警察にお世話になることが全くなく児童の落ち着いた生活と職員の養育力の向上ができたと思っています。児童の学力向上と高年齢児の進路に対する意識も高まっています。

今年度は、児童の養育の向上を継続させながら愛育園の養育の基本三則である

- ①日課を守らせ、日課の質を上げる
- ②すべての行事に全力で取り組ませ、最高のレベルを発揮する
- ③「夢」を意識させ生活に希望を持たせる

この 3 つを柱に児童と関わっていきたいと思います。また人に何かをしてもらっただけでなく何かをしてあげること、人に感謝され自信になるようなプログラムを今年度は検討し実行していきたいと思っています。

そして、児童の養育の質と向上に一番必要な職員の連携をより一層高めていきたいと思っています。今年も一年よろしくお願いいたします。

あおぞらホーム方針

あおぞらホーム長 富沢正樹

あおぞらホームのホーム長を務めさせていただいております。保育士の富沢正樹と申します。

今年度のあおぞらホームは「職員が一丸となることができこそその養育」という事を、ホームの最重要方針として、以下の 3 つに力を注いでいきたいと思っています。

「基本的な生活能力を身につけられるようになる」

穴の開いたズボンを履く事や、入浴後の脱衣所をビショビショにしてしまう事、散らかり放題の居室に布団を敷いて寝る事、歯磨きせずに口が臭い事。それらの事を「平気」と感じる児童がホームにはおります。「平気」ではなく「恥ずかしい」という感覚が生まれてくるように、日常生活の中で細かく手入れと声掛けを行い、当たり前のことを当たり前に行えるようにしていきたいと思いま

す。

「児童一人一人が将来の夢を持ち、努力が出来るようになる」

各年代の児童がおりますが、共通して言える事は、将来の夢、目標がないか、あっても漠然としすぎているという事です。ただ、それは児童の責任ではなく、職員の対話と関わりが不十分だからだと感じています。児童任せにせず、児童がただ生活するのではなく、児童一人一人と担当職員が対話を重ねていき一人一人が夢や目標を持った状態で日々の生活を送ることが出来るようにしていきたいです。集団生活の中でも、一人一人はそれぞれに目指す目標があり、集団で動くときは動く、個人の時も自立の為に時間を過ごせる。そんな児童を育成していきます。

「人にしてもらおう側から、してあげられる人間に」

昨年度、老人ホームを訪れ歌のプレゼントをするという機会がありました。しかし、あおぞらホームのある小学生は、「そんなの行きたくない」と拒否するという事がありました。普段から何かと「人からしてもらおうことの多い」園の児童ですが、お礼やお返しとなると気持ちよくできない。いつしか、してもらおうことが当たり前になってしまい感謝の気持ち、奉仕の気持ちが薄れてしまっているように思います。そこで今年度は、児童の奉仕活動のような取り組みを入れていきたいと思えます。昨年度の冬、雪が激しく積もり、何日もかかる雪かきをあおぞらホームの児童は園の敷地内外を毎日毎日せっせと行っている姿もありました。そのような活動、例えば洗車、畑作り、花壇作り、ドブ掃除、行事の準備などを積極的に探して計画を立てていきます。

以上 3 つの方針の中で、あおぞらホームは今年度、児童と本気で関わる 1 年になるよう努めてまいりますのでよろしくお願い致します。

平成 26 年度まごころホーム方針

まごころホーム長 石崎早織

今年度も引き続きまごころホーム長をやらせていただくことになりました。

今年度は 16 名の子どもたちと 6 名の職員で 4 月をスタートします。職員も 1 名増え、昨年度よりも一層よい教育を目指す為にいくつかの目標をあげていきたいと思えます。

まず 1 つ目は「職員の心を一つにし、子どもの養育にあたる」です。これはいつも園長先生がおっしゃっている「職員が良くなれば子どももよくなる」これは 25 年度の子どもの姿を見て確信した事です。まずは私たちが同じ思いを持って子ども達に関わる事。それには担当の思いだったり普段の生活をしっかり把握することで、今この子にはどんな関わりが必要かなどが分かってくると思えます。そうなれば職員の中でも役割が出てきます。話を聞いてあげる人。その話を聞いてどのような指導の仕方をするのか考える人……。やはりこのような事は決して一人ではできません。たくさんの職員の協力があってこそよりよい関わりできると思えます。25 年度のまごころホームを振り返ってみると、引き継ぎはやっているが担当の思いまでもはしっかりと理解できていなかった事。困っていてもなかなか相談できない職員に私から話せる環境を作ってあげることができなかった事が反省点です。なんでも話せる環境を作り、どこで困っているのか、今こんなことで悩んで

いるなど、私自身がいち早く気づき、ホーム職員みんなと一緒に考え解決していきたいと思えます。

2 つ目は「自立に向けた養育」です。これは 25 年度にも目標で立てた一つです。

25 年度は 3 名の卒園生を送りだしました。送り出すにあたり 1 年間で私たちが子どもたちに何を教え、何を準備するかなど子どもたちを通して学んだ 1 年間でした。26 年度もまごころホームでは 2 名の子どもたちが卒園をします。この一年間で自分自身の事を見つめ直し、まずは人の話を素直に聞き入れることを教えていきたいと思えます。人の話を素直に聞ければ自分自身の成長に繋がっていくと思えます。また嫌な事にぶつかっても決して途中で逃げ出すことのないように常に話をしていきたいと思えます。そして最後に一人でも生活できるように自分で考え行動できるように日常生活の中で教えていきたいと思えます。

3 つ目は明るいホームにすることです。明るいホームとは何だろう？と考えた時まずはしっかりと自分から挨拶をする子を増やすことだと思います。挨拶が飛び交えば自然と雰囲気も明るくなりますし、それだけでコミュニケーションが取れます。また挨拶をきっかけに会話も増えてくると思えます。まずは職員が子どもの見本になること。そして常に笑顔でいることを全員が心がけて子どもと関わりが持てるようにしていきたいです。

今年度もホーム職員はもちろんですが、全職員と協力し、子どもの支援にあたっていきたいと思えます。今年度も一年よろしくお願い致します。

26 年度そよかぜホーム方針

そよかぜホーム長 上村美咲

今年度、そよかぜホームは幼児 4 名、小学生 2 名でスタートとなりました。

子ども達をみていると、相手に物や順番を譲ったり、優しい姿もみられましたが、その反面、自分が一番！と周りを気にせずにいる子どもの姿もみてきました。この気になる点をなくそう！ということで今年度そよかぜホームではおもいやりをもつことを目標としてやっていけたらと思えます。まずは職員の方から意識をし、子どもが相手に物事を譲ることができた時にはその姿を認めていくこと。また、誰かが悲しい思いをしている時には子ども達にその気持ちを職員の方で伝えていく。こういったことがあったから悲しい気持ちになっている、そういったことを伝えていくことで、人の気持ちが分かり、人を思いやる気持ちが育ち、ホームのみんなが過ごしやすい環境になっていけたらと思えます。

もう一つ考えていることはホーム行事を充実させることです。昨年は園行事がない月はホーム食を行っていましたが、今年度はホーム食だけでなく、ピクニックや子ども達が行きたい場所など、外へ出かけることも増やし、子ども達に挑戦することや、協力することなど様々な経験をさせていけたらと思えます。

子ども達が過ごしやすい、また、楽しみがあることで子ども達の生活が充実していくよう、ホーム職員、他ホームの先生方と協力しながら取り組んでいきたいと思えますのでよろしくお願い致します。

調理方針

新年度がスタートし、調理室に新人を迎えフレッシュに動き回っています。

食事はほぼ年中無休です。朝食・昼食・おやつ・夕食をその時間に間に合わせる事の大切さ、一人だけ頑張っても仕事はなかなか進みません。かといって洗い物だけをしていてもダメです。まわりを良く見、誰が何をしているか、自分が何をすればよいのかを感じとり、声を掛け合い互いに思いやった仕事をし、気配りができるようになれば時間通りに食を提供することが出来ます。そして、安心・安全な食事をするには、衛生管理が重要です。自己健康管理から始まり、手洗いはもちろん、まな板・台の上を常に清潔にし、一人一人が気をつける事を心がけます。最後に、子ども達に食事のマナーや、ホーム食の実施、横割り調理実習、自立支援など愛育園の味と心を伝えていけたらと思います。

調理 5 人が一つの和になり、頑張っていきます。

「やしょうま」づくり

お釈迦さまの御命日である旧暦 2 月 15 日に合わせて毎年、愛育園でも作っている「やしょうま」。今年はいつもの模様に加えて、連盟給食部会の調理実習で教わったスイカに見立てたやしょうまも作ることにしました。まず、種代わりの黒ゴマをたっぷり入れ、赤の食紅で色づけした生地を棒状に丸めます。次に平たく伸ばした白色の生地と濃いめの緑色で色づけした生地を重ね、その上に棒状に丸めたものを置き、クルッと丸め型を整えながら伸ばしていきます。簡単そうに見えますが赤・緑・白のそれぞれのバランスがとても重要となります。試行錯誤しながら作ったやしょうまを見学に来た幼児さんが「スイカだ!! 本物みたい!!」「美味しそう!!」と興味津々で喜んでくれました。

年に一回しか作る事の無いやしょうまですが、スイカ模様にすることで子ども達に「こんな食べ物もあるんだ!!」と少しでも身近に感じてもらうことが出来、良かったです。また、新しいことを取り入れることにより、私も勉強することが出来ました。

ホームだより

あおぞらホーム

桜の蕾が膨らみ始めたこの頃、いよいよ、あおぞらホームも始動し始めました。本年度は新たに 3 名が加わり、20 名でのスタートです。ピカピカの 1 年生も 2 名居ます。

調理主任 若林厚子



調理員 武田絵里子

1 日に担当発表、2 日には部屋替え、子ども達の気持ちも晴れやかです。久しぶりに整理整頓された子ども達の部屋を見て、感動を覚えました。(いつまでこの状態がキープ出来るのか・・・)

本年度、あおぞらホームがやるべきことはたくさんあります。元気いっぱいのお参りを継続すること、自分をコントロールする心を育てること、そして球技大会。まずは、今月末から始まる球技大会の練習に備え、子ども達の闘志をくすぶって行くことが大切だと思います。シーズンを通じ、一皮むけた強い男の子に育て上げたいと思います。本年度も、どうぞよろしくお祈りします。

まごころホーム

保育士 土屋海都

朝晩を通し日増しに暖かい日が続き春めいてきました。先月の卒園式まごころホームから 3 人の卒園生を見送りました。今年は 2 人の女の子が小学校に入学で高校 1 年生が 1 人新しい環境の中学生活がスタートします。不安や期待がありその中でも楽しみなことがこれからあるとワクワクしています。良いスタートが切れるよう見守っていきたいと思います。春休みの間に部屋替えしまたきれいに掃除をしました。元気一杯遊ぶ!、友達と仲良く遊ぶ、勉強頑張る!、漢字を頑張る、進路を決める、検定を取るなど部屋替え後のお茶会で一人ひとりこの 1 年の目標、頑張りたいこと、やりたいことを発表しました。気持ちを新たにそれぞれが 1 年の目標を忘れず頑張っていきたいなと思います。また、まごころホームに新しい先生が入りました。園の生活に徐々に慣れ職員同士協力しあい子どもたちを見ていけたらと思います。子どもたちと一緒に楽しんで本気でぶつかって沢山関わって明るい元気なまごころホームでいきたいと思っています。

そよかぜホームだより

保育士 青木春奈

3 月まで残っていた雪もようやく全部融け、春らしいあたたかい天気が続くようになりました。寒くても活発に遊んでいた子ども達ですが、よりいっそう外遊びを楽しんでいます。花が咲いていたのを教えてくれる子、虫を見つけて怖がる子、中にはトレーナーを脱いでまで元気に走り回っている子もいます。そよかぜホームでは、この 3 月で 1 名の児童が卒園となりました。また、2 名の児童が本体のホームへ移動となり、メンバーも少しずつ変わっています。新年度、そよかぜホームは、小学生 2 名、幼児 4 名の、計 6 名でのスタートとなりました。部屋替えが終わった後のお茶会では、それぞれやりたいこと、がんばりたいことをひとりずつ発表しました。ピクニックに行きたい、ホーム食がやりたい、恐竜公園に行きたい、苦手なきのこを食べられるようになる…などなど。昨年度は、ホーム食を主なホーム行事として行ってきましたが、今年度はホーム食だけでなく、ちょっとしたおでかけや遊びも、そよかぜ皆でできたらいいなと思います。

